

事業完了報告書（実行団体）

事業名:	孤立解消のためのコミュニティプレイスの運営～多世代が遊び・交わり・働く『ごちゃにわ』
資金分配団体名:	特定非営利活動法人ACOPA
実行団体名:	手賀沼まんだら
実施時期:	2021年3月～2022年2月
事業対象地域:	千葉県我孫子市
事業対象者:	近隣在住の子ども、父母、高齢者とその家族

Version 3.2
日付: 2022年3月15日

I. 事業概要

事業実施概要	地域の耕作放棄地を地権者との「共同管理」という形で貸していただき、開墾し、誰もが集える場所として活用した。コミュニティプレイス「ごちゃにわ」の機能として、①子ども遊び場②コワーキング③ピオトープでの生き物観察／農業体験の場④誰もが気軽におしゃべりができる場が設置され、活用された。また、事業設計当初には予想していなかった機能として⑤公教育期間（小学校・中学校）の体験学習の指導・実践の場の提供⑥地元のカンパ場で自然体験プログラムの提供⑦社会福祉協議会ボランティアセンター主催「中高生ボランティア体験」での体験受入⑧世界各国に拠点のあるモノづくりの会社とのコラボプロジェクトの実施が実現しました。「ごちゃにわ」に集まった大人と子どもで新しい企画を考え、準備をして、実施し、課題を即次の企画に繋げていく取り組みが絶えず現場にあり、参加したい人が自由に参加することができる雰囲気も常にあった。そこに行けば、誰か知り合いがいて、自分を取り戻すことのできる「サードプレイス」としての機能が確立できた。「ごちゃにわ」設置周辺地域の住民との関係構築については、とても気を遣った。大々的にPRするのではなく、機会に応じて徐々に活動の応援団を増やしていったことで、拒否されることもなく、受け入れてもらうことができた。
--------	---

II. 課題・事業設計の振り返り

課題設定、事業設計に関する振り返り	実施時期の前半はコロナの影響が大きくなり、子どもの遊びが制限されていたので屋外で思いっきり走り回ったり、遊んだり、ちょっとしたおしゃべりの場として効果を発揮した。「そこに行けば、必ず友達がいる」という安心感は、地域コミュニティから子どもらしく遊ぶ声を騒音と非難され、排除された子ども達、その親にとっても救いになった。「ごちゃにわ」で生まれたフラットな関係は、「ごちゃにわ」だけにとどまらず、地域や学校などでも登校時に挨拶をしあったり、困ったことがあっても自分の親以外に信頼できる大人に相談するなど様々な効果を生み出した。「ごちゃにわ」に集い時間と空間を共有することで培われる人間関係が子どもにとっても、大人にとっても閉塞感や孤独感の解消になった。共創・協働の仕組みの中で、関わりが深い人、浅い人、常連の人、たまに顔を出す程度の人など関わりも多様であるが、各自が自主性の範囲の中で無理なく関わるコミュニティとなった。運営に関する資金については、2年目からは受益者負担で運営ができる方法を検討していたが、母子家庭や貧困世帯の子ども達の利用もあり、受益者負担での運営は困難であることがわかった。
-------------------	--

III. 今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）※複数設定の場合はコピーし複数記載ください。

①受益者	②課題	③今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）	④指標	⑤目標値・目標状態	⑥結果	⑦考察
その他	居場所の不足	本事業の機能により孤立感が解消される	延べ利用者数を集計する	高野山学区内1664世帯のうち子育て世帯500世帯の70%が当事業を知っており、またその40%が活用したことがある	「ごちゃにわ」開設延べ日数133日（4月～12月末）、延べ利用者数1512名。	受益者：孤立感を感じている住民 事業設計当初は、「ごちゃにわ」がある学区の小学校に広報用のチラシを撒く予定だったが、設置地域の地域性、また地権者の意見（近隣住民、行政から苦情が出たら速やかに撤回して欲しい）を考慮し、周知を積極的に実施せず、地域に馴染ませることを優先させた。しかし、高野山小学校5年生（120名）の林間学校プログラムにおいて事業周知できた。
その他	その他	孤立解消ツールとして「ごちゃにわ」が活用されている	利用者に対して「ごちゃにわ」の各機能（コワーキング、短時間託児、子どもの遊び場、しゃべり場、畑ピオトープ）の評価集計する。	ごちゃにわを利用した人がどの機能を活用したかを毎回アンケートを取る。	子どもの遊び場95%、会議等仕事場15%、しゃべり場50%、畑・ピオトープ20%、託児30%	受益者：孤立感を感じている住民 利用者は1回の来所で多数の機能を活用していた。託児機能については、保護者同士の同意の下で行った。
その他	居場所の不足	「ごちゃにわ」が親子の居場所として活用されている	理事と「ごちゃにわ」会員の対話により質的な評価を把握。	理事と「ごちゃにわ」会員の座談会を実施。	「ごちゃにわ」が既存の公園や行政サービスと差別化され、親子の居場所として選択され、活用されていたことがわかった。	受益者：親子 リスクは残し、ハザードは取り除くことで、子どもたちの五感を研ぎ澄ませた「遊び」を重要視する親にとっては「安全」を最優先に確保された公園など差別化され、貴重な場所として活用されていたことがわかった。
その他	その他	手賀沼流域を活用した“遊び”の波及により、コミュニティの活性化が図られる。	手賀沼流域を活用したイベントの実施	①年間5回／「ごちゃにわ」事業の一部が手賀沼流域で展開される ②自分の暮らす地域でコミュニティプレイスを運営してみたい方が参考にしたいだけ様の親の会がコミュニティプレイス設置について検討を初めており、アドバイスやサポートを実施していく	①Recampしようなん「BambooCamp」企画運営4回開催／北柏文化祭コンテンツ参加／北柏ハロウィン参加／teganuma weekend参加②「ごちゃにわしんぶん」を参考に我孫子市湖北地域で不登校の親の会がコミュニティプレイス設置について検討を初めており、アドバイスやサポートを実施していく	受益者：住民 ①手賀沼流域の各所にて手賀沼での自然体験ワークショップの実施。延べ500名以上の親子が参加した。いつも「ごちゃにわ」で遊んでいるツールを「ごちゃにわ」の子ども達が先生となり教えることで活動への誇りや楽しさが実感できた。②「ごちゃにわ」事業は仕事や育児に現役のお母さんでも仲間と子どもと一緒に取り組むことができることを広く周知する目的で作成した。自分の暮らす地域で、暮らす人たちが自分たちのやり方でチャレンジ可能であることを伝えたい。

子ども・学生	不登校	学校、家庭以外の居場所として活用される。	相談件数を集計する	事業実施期間（12ヶ月）で5件の相談がある	学校を休みたくなった時に日中もごちゃにわで過ごすことをしたケースが延べ8名。また、不登校児童の居場所作りをしたと考えている保護者からの相談1件。	学校に行かずに「ごちゃにわ」で一日を過ごした子どもに会いに学校の担任の先生が放課後に「ごちゃにわ」に欠席した子どもの顔を見にくることもあり、学校との関係も和やかに連携できた。「手賀沼まんだら」代表澤田、理事柏田が学校の地域コーディネーターの委嘱を受けており、学校との関係が既に十分できているので、子どもを中心とした連携が可能となっている。
--------	-----	----------------------	-----------	-----------------------	--	---

IV. アウトカム（事業実施以降に目標とする状況）*

事業実施以降に目標とする状況	①多様性の確保>「ごちゃにわ」で過ごすことで異年齢の子ども同士の関わりがあったり、親以外の大人との関わりによって、自分らしくあること、他者との距離感、仲間との一体感、達成感などを通して成長する子ども達を目の当たりにし、年齢、価値観、仕事、考え方が多様であることの豊かさを実感したので、「ごちゃにわ」がより多様であるように（例えば、障害のある人がいる家庭、外国にルーツのある家庭）サポーターを増やしていく。②体験のパッケージ化>公教育機関が活用しやすいように「ごちゃにわ」で体験できるプログラムをパッケージ化して販売する（4月から販売予定）。③子育て世代のコミュニティ参加の促進>従来の「一度入ったら抜けれない」「減収奉公」のコミュニティではなく、「出入り自由」「持続可能」な新しいコミュニティのあり方を提案
考察等	「ごちゃにわ」に遊びに来る子ども達の変化が大変顕著であったので、のびのびと自分らしさを発揮し始めた子ども達に親が驚き、新たな我が子の可能性に気づき、自分も一緒に成長していくプロセスを何例も見ることができた。また、子育てをシェアできるコミュニティとして「ごちゃにわ」が機能したことで、「ここに来て、子どもが遊んでいる様子を見ながらみんなとおしゃべりする中で、我が子が初めて可愛いと思えた」と話す母親もいた。この変化を多くの子育てに奮闘している親子に体験してもらいたい。自分たちの地域でも「ごちゃにわ」をやってみたいという声もいただけており、活動のノウハウの共有などもしていきたい。運営資金は「ごちゃにわ」事業での受益者負担では到底無理なこともこの1年間で痛感した。運営資金の課題解消を引き続き検討していきたい。

V. 活動

活動	進捗	概要
ごちゃにわの場づくり（ビニールハウス）	計画通り	ビニールハウスが当初廃墟であったので、シートを子ども達とカラフルにデコり、張り替えた。また、ハウス内の家具をVIVITA TOUKATUの拠点で使用していた家具を拠点撤去を機に譲り受け「ごちゃにわ」に設置。ビニールハウス内の暑さ対策について東京大学都市計画研究室やVIVITAのエンジニアに意見をもらい検討した。「妻子原の森を守る会」の活動で出た切り株を「ごちゃにわ」の家具、遊具として活用した。雨天の日は、子供達がビニールハウス内を走り回るので、設置しているファニチャーのレイアウトを変更したり、イベント時や会議など多様な用途に応じて模様替えをした。また、様々な人が打ち合わせ等で「ごちゃにわ」に集まるので、落ち着いて会議ができるようにした。
ごちゃにわの場づくり（屋外）	計画通り	気温の高い日はビニールハウス内の温度が上がるので、屋外の竹やぶを整備し、涼しく快適に過ごせるようにサポーターが主戦力となり整備した。崩壊したビニールハウスの鉄骨などが土に埋まっているので、取り除き、草刈り、ゴミ拾いをし、安全に子ども達が走り回れるような環境にした。雑草との戦いの季節は、時間を見つけてスタッフが草刈りを実施。屋外の畑には、とうもろこし、トマトなどが実を付けて、さつまいもを掘って蒸して食べたり、大根を育てて沢庵を作ったりした。ピオトープも作り、「ごちゃにわ」に来た子供達はどんな生き物がいるかを観察している。ピオトープに関心のある高校生がピオトープの更なる充実を図るべく、プランを持ち込んでいる。竹林が凄まじい勢いで拡大するので、定期的に整備日としてお父さん達も力も借りて整備した。
ごちゃにわの定期的な開設	計画通り	4月から毎週火曜、水曜、木曜の10時から17時の定期オープンをスタートした。オープン日は10時のオープンを待って、近所の未就園児が親子で遊びに来たり、学校帰りに「ごちゃにわ」に「たたい」と帰宅する小学生で賑わっている。春休み、夏休み、水曜は10時からバンザマストまでオープンした。12月末で一時クローズした（報告書作成など事務作業を進め、次年度の計画などをするため）9ヶ月で延べ1,512名が利用した。
人が集まることの効果	計画通り	①多様な関わり>プロジェクト実施>>「ごちゃにわ」に創造力、好奇心に満ちた人が集まることで、社会やコミュニティが抱える課題に対する解決策を楽しみながら解決していくソリューションの提案が生まれている。その一つとして「プラスチックゴミのせいかいin手賀沼」プロジェクトが生まれ、6月から3ヶ月をかけて取り組んだ。「ごちゃにわ」で何度も打ち合わせをし、子供たちにも相談したり、子供たちと一緒に本を読んで学んだりしながら企画を構築していったプロジェクトの成果は、冊子、作品となり、手賀沼流域4箇所（Recampしようなん、手賀沼weekend、ららぽーと柏の葉、北柏文化祭）で巡回展を開催した。【納涼祭】（当初柏市主催の納涼祭に出店予定であったが、緊急事態宣言の発令により中止になったので、急遽「ごちゃにわ」で実施）、「ごちゃフェス」（「ごちゃにわ」の子どもたちが「子どもによる子どもが主役のイベントを企画したい!」と夏休みから2ヶ月かけて企画、準備、運営をしたイベント。東大や柏市など関係団体との調整は大人が行った。）など、企業や行政、大学などの様々な大人が集い、話し合ったり、企画を進めていく姿を見て、子ども達も自ら企画をし、会議（オンライン、オフライン）をしたり、準備をするなどの見様見真似、試行錯誤しながら、実現させた。
調査方法/指標の検討	ほぼ計画通り	コミュニティプレスに関する論文や書籍を読み、「ごちゃにわ」プロジェクトの全体構想の検討、指標の適用の検討などを行った。東大永野先生、都立大渡辺先生に指標についての相談（4月12日、18日）をし、定量的ないくつかの指標と、「ごちゃにわ」のことが表現できる定性的な指標が確定した。
秘密基地プロジェクト	計画通り	5月5日に子供たちによるclan cafeがオープン。「ごちゃにわ」の交流会に訪れた多くの人たちが子供たちの一生懸命なカフェ運営を絶賛してくれた。オープン準備から買い出し、クッキーなどのお菓子作りなど11人の子供達がオンライン、オフラインのミーティングを重ね、役割分担をし、たくさんのお客さんに来てもらう体験ができた。その様子を見たお客さんの子供達が「自分もclan cafeのスタッフをやりたい!!」と集まっており、プロジェクトはますます盛り上がっている。
託児機能	ほぼ計画通り	会員相互の信頼関係において、託児システムが運用できた。当初、システムとして託児を機能させたいと考えていたが、預ける側も預かる側もお互いに顔見知りとなってからしか機能しないことがわかった。
ごちゃにわの会員/運営システムの構築	計画通り	NPO法人balloonと「ごちゃにわ」の運営システムについて、balloonが実施してきた実践例を参考に検討する。シンプルな運用システムを構築していくことを目標としているが、「ごちゃにわ」の機能が多岐に渡るために各機能の運用システムを検討。主要スタッフだけでなく、「ごちゃにわ」会員の常連の人たちにも「日直」として「ごちゃにわ」の管理スタッフを担ってもらえるようなシステムができた。

VI. 想定外のアウトカム、活動、波及効果など

想定外のアウトカム、活動、波及効果など	「ごちゃにわ」の開設、整備が完了し、4月から定期開設がスタートした。6月には、鎌ヶ谷市の公立中学校が手賀沼の自然体験プログラムの実施について相談があり、コミュニティプレイスの整備として活動を実施した。また、我孫子市の公立小学校の総合学習から林間学校のテーマの一つとして「里山の竹林について」をサポートし、「ごちゃにわ」についても授業の中で説明した。「ごちゃにわ」の家具を譲ってくださったVIVITAと「ごちゃにわ」での雑談をきっかけにゴミアートプロジェクトの企画が持ち上がり、3ヶ月間のプロジェクトを共催した。プロジェクト終了後も手賀沼流域で作品の巡回展を開催している。このゴミアートプロジェクトと竹林整備、生き物観察の3つを手賀沼の自然体験プログラムとして、近畿ツーリスト、アグリビジネスパーク事業推進協議会、VIVITA、新松戸造園、手賀沼バドクラブ、手賀沼水生生物研究会と手賀沼まんだらで検討会を開催し、観光庁の事業としてパッケージ化が試作された。2022年4月から奥手賀沼ツアーの商品として販売予定。「ごちゃにわ」での自然体験がより簡単に多くの子どもたちが体験できる仕組みができた。Recampしようなん(株)からは「ごちゃにわ」の様な空間をキャンプ場内に作って欲しいと提案があり、毎月1回、「ごちゃにわ」での「遊び」を出張して提供している。「ごちゃにわ」という拠点があることで、人が集まり、新しいアイデアや繋がりが生まれている。子どもが主役であること、私たち自身が時間や労力、やる気を搾取されないことなどに注意しながらコラボが実現している。
---------------------	---

VII. 事業終了時の課題を取り巻く環境や対象者の変化と次の活動

課題を取り巻く変化	当該事業実施後半については、コロナの状況も落ち着き、社会の様々なシステムも平時となり「コロナ禍」前提とした当事業のニーズについては完了したと認識していた。しかし、年明けからまた第5波に伴う学級閉鎖や保育園等で濃厚接触者に頻りに認定されるなどコロナによる子育て世帯、子ども達の「生活のしずらさ」が再発した。リモートワークが当たり前になったので、自宅にいても仕事ができるが、子どもと一緒に空間にいて仕事をしなければならない大変さを訴える母親が多数おり、課題を感じた。また、この1年間のまとめを作成するにあたり、座談会やアンケートなど「ごちゃにわ」を活用した方々からの声を多く知ることとなったことで、本事業が「孤立解消」だけでなく、子育て支援としても効果があったことを認識した。親も子どもも身近なサードプレイスとして「ごちゃにわ」があることで、「生きづらさ」の解消に効果があったことがわかった。「ごちゃにわ」に集う地域の高齢者からこの地域の昔の姿や生活スタイルを聞くことで改めて自分達の今の暮らしをそれぞれが考え、振り返ることきっかけになった。高齢者も家で一人きりで閉じこもりがちの生活をしていたが、「ごちゃにわ」で子ども達が元気に走り回る姿を見て「懐かしい景色が見れた。子ども達が外で遊ぶことができる場所があると私たちも元気をもらえる」とごちゃにわに寄ることが日課になっている方もいた。
-----------	---

VIII. 他団体との連携

連携先	実施内容・結果
NPO法人balloon 代表 鈴木亮平	当事業に対する助言、全国の先進的事例の紹介など ・ 特に事業スタート時の運営体制、会員システムの構築の際に様々な事例を提供していただき、それぞれのメリット・デメリットなどを提示してもらった。
VIVITA TOKATSU 小村陽子	当事業へのテクノロジー活用への助言、エンジニアの紹介、「ゴミアートプロジェクト」の共催 ・ 柏の葉を拠点とする創造的なモノづくりなどを行うコミュニティとの交流、協働PJの成功体験は、コミュニティ運営の新しい視点を付けた。
(株)新松戸造園 廣川真知子	「ごちゃにわ」の竹林整備、竹の活用方法の助言、作業補助、「ゴミアート」PJ協力 ・ 造園会社の専門知識を助言もらうことで、竹林の整備を安全に行うことができた。
手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会 星野奈月	手賀沼周辺の事業者、団体との連携促進への助言 ・ 通常の活動では繋がれないような多様な団体、事業者、行政との連携を提供してくれた。多くの人に当事業を知ってもらうことができた。
東京大学都市計画研究室手賀沼プロジェクト	本事業の評価指標の設定について相談に乗ってもらった。また、先進的な取り組みとなるポイントの重要性についてご教授いただいた。学生が手伝いに来てくれた。

IX. インプット ※事業完了月の月次収支管理簿の金額を入力ください。(精算金額と一致させる必要はありません)

事業費	計画額		実績額		執行率
	直接事業費	管理経費			
	4,304,965	753,220	4,303,355	760,160	100.0%
合計	5,058,185		5,063,515		100.1%

補足説明

X. 広報実績

広報内容	内容
1.メディア掲載 (TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等)	広報誌「ちいきしんぶん」2021年6月25日号、「まち活マガジン」2022年1月号
2.広報制作物等 当該事業費を使って制作したもの	1年間の「ごちゃにわ」の取り組みをまとめた「ごちゃにわ新聞」を作成。「ごちゃにわ」の活動波及の為に希望する方には1部を差し上げ、また、今後の「ごちゃにわ」の活動を継続する為に必要な資金の一部を応援してもらったためのツールとして2部以上希望される方には応援購入いただくこととしている。「ごちゃにわ」の取り組みで協力してくださった方、団体へのお礼として、配布する「手ぬぐい」を作成した。
3.広報制作物、購入物等でシンボルマークの活用方法 (事例)	我孫子市社会福祉協議会の「夏休み中高生ボランティア体験教室」のオリエンテーション資料、手賀沼流域フォーラムでの登壇資料、「ごちゃにわ新聞」最終ページへの添付、ごちゃにわwebサイトへの添付など
4.報告書等	「ごちゃにわ新聞」、「ごちゃっこ新聞」各1,500部作成

XI. ガバナンス・コンプライアンス実績

①規程類※の整備実績 ※規程類：定款・規程及び準ずる文書類(指針・ガイドライン等を含む)	状況	内容
1.事業期間中に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。	整備中	定款、役員報酬規定、倫理規定、コンプライアンス規定、理事会の運営規定、個人情報に関する規定は整備し、ホームページにて公開中。
2.上記設問1で「整備中」の場合は、事業開始時と比較して、整備状況がどのように改善されたかを記載してください。		

3.整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。	一部未公開	給与規定については、整備しているが、公開はしていない。給与対象者が居らず、費用弁償/謝礼という形での支出としている。ただし、謝礼の金額については、給与規定に基づいている。
4.変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。	変更はなかった	
②ガバナンス・コンプライアンス体制	状況	内容
1.社員総会、評議員会、理事会は、規程類の定める通りに開催されていますか。	はい	
2.利益相反防止のための自己申告を定期的に行っていますか。	はい	
3.関連する規程類や資金提供契約の定めどおり情報公開を行っていますか。	はい	
4.コンプライアンス委員会またはコンプライアンス責任者を設置しましたか。	はい	
5.ガバナンス・コンプライアンスの整備や強化施策を検討・実施しましたか。	はい	
6.報告年度の会計監査はどのように実施しましたか。 (実施予定の場合含む) (複数選択可)	外部監査	
	内部監査	
	実施予定はない	
7.本事業に対して、国や地方公共団体からの補助金・助成金等を申請、または受領していますか。	いいえ	
8.内部通報制度は整備されていますか。	いいえ	

XII. その他

自由記述

「ごちゃにわ」の1年間の取り組みをまとめた新聞と「ごちゃにわ」の子供達が作成した「ごちゃっこ新聞」を添付します。